



日本SPF豚協会だより

2023.4
No.91

提言

CM農場の生産成績

SPF豚農場認定委員会
学識経験者委員

岩村祥吉



私は2016年度より認定委員をさせていただいております。私よりも長く委員をされている先生方が多くいらっしゃいますのでおこがましいのですが、これまでの委員会で感じたことを申し上げさせていただきますとしたいと思います。

認定委員会は四半期ごとに会員農場からの認定申請について防疫設備、防疫管理の状況、ヘルスチェック、さらにCM農場においては生産成績を個々に審査して、認定基準を満たしているかを審査しています。認定期間の更新になる農場では既存の防疫設備、防疫管理については前年度から変更がない場合にはその確認がなされ、ヘルスチェックは対象疾病等の発生がないことの確認ですので、問題がない場合にはそれぞれの判断は比較的容易です。一方、生産成績については種々の要因で毎年変動することから過去2年間との比較も含めて種々の意見が出ます。

指摘事項として多いのはA薬品の使用についてです。またそれと関連して母豚や哺乳子豚、育成豚、肥育豚の感染症の発生状況、ワクチンの使用状況などの感染症対策です。個々の農場の状況により実施することは容易でないと理解はしていますが、洗浄、乾燥、消毒による豚舎環境の改善やワクチン接種等により、A薬品の使用を減らしたという事例をうかがうとうれしい限りです。

私は長く雌豚の繁殖や繁殖障害に関わる仕事をしてきたことから、飼養頭数、年間分娩回数、年間哺乳開始頭数、年間離乳頭数に目が行くことが多いです。飼養頭数から農場の規模がわかりますが、種雄豚と母豚の頭数から人工授精の実施状況もうかがえます。自然交配が主な農場では種雄豚が多くなりますので、人工授精の採用による雄豚の減頭を考えてみてはどうかと申し上げます。交配をすべて人工授精で実施している農場で種雄豚が0頭あるいは1頭と極端に少ない場合には発情発見のために複数頭の雄豚がいるのではないかと申し上げます。

生産成績調査では、年間分娩回数は年間の正常分娩回数を年平均母豚数で除して計算されていますが、母豚の妊娠期間と哺乳期間、離乳後の交配・妊娠までの期間の和で365日を除すことでも計算できます。生理学的に上限に近いものですが、例えば3週間離乳で離乳後7日に交配して妊娠したとすると年間分娩回数は $365 / (114 + 21 + 7) = 2.57$ となりますので、生産成績で2.5を超えている農場では繁殖管理が極めてうまくなされているといえます。一方、離乳後交配までの期間が長い、初回発情の交配で妊娠しない、妊娠診断が不適切で不妊期間が長いなどで空胎期間が長くなると分母が大きくなり、年間分娩回数は減少します。3週間離乳を実施している農場で年間分娩回転数が2.2であるとすれば平均で23.9日の余分な空胎期間があることとなりますので、その原因を洗い直してみることが必要でしょう。

もちろん子豚をしっかり育てようと4週間離乳している農場であれば年間分娩回数は2.45(5週間離乳であれば2.34)になりますので、一概に年間分娩回数だけを重視する必要はありません。また、年間分娩回数のわりに年間哺乳開始頭数が少ない時には、高齢豚が多くなっていることも考えられるので、産歴構成にも注意して母豚の計画的な更新を行うことも必要でしょう。

多産系母豚では離乳舎や肥育舎の収容能力を上げることが重要で、この対応が不十分だと哺乳開始頭数は増えてもその後の密飼いにより離乳頭数や出荷頭数が増えていないとの指摘につながります。母豚の飼養頭数を減らしても出荷頭数は減っていない農場もありますので、すぐに豚舎の収容能力の改善ができない場合には、母豚の減頭を考えてみてはいかがでしょうか。

今更ながらではありますが、生産成績のうち繁殖に関わる項目についてみても、いくつかのことがうかがえますので、今一度振り返っていただいでご参考になることがあれば幸いです。

SPF豚セミナーを ハイブリッド方式で開催 当日の様子はホームページで公開

協会では1月26日(木)午後1時より、KKRホテル東京「丹頂の間」において令和4年度SPF豚セミナーを、オンラインとのハイブリッド方式で開催いたしました。会場、オンライン視聴合わせて80名を超す方にご参加いただきました。

坂口一平協会副会長の司会のもと、北島克好協会会長の挨拶、藤田世秀協会専務理事による認定CM農場生産成績年次報告に続き、生産成績最優秀CM農場表彰式を執り行いました。コロナ禍によりセミナーでの表彰式は3年ぶりとなりました。

総合生産成績部門最優秀賞を受賞されたのは(有)高橋畜産(北海道、ホクレンピラミッド)です。この表彰は3年間の平均値をもとに選考されるものですが、高橋畜産は初めて選考対象となった農場で、初参加、初受賞の快挙となりました。

一方、商品化頭数最優秀賞は農事組合法人八幡平ファーム(岩手県、全農畜産サービスピラミッド)、こちらは8年連続10度目となり、こちらも他の追随を許さない見事な受賞となりました。

濱岡隆文選考委員会委員長は講評で「両農場とも成績は過去最高を更新しました。このことは高く評価できる。SPF養豚のポテンシャルの高さを示しており、安心な豚肉を消費者に届けるシステムを具現化しているといえます。さまざまな困難を克服した努力の結晶であると思います」と称賛、また「生産成績の向上は続いています。哺乳技術がそれに追いついていない現状もあるように思います。更なる技術革新を目指してほしい」と述べられました。

両農場には北島会長より表彰状とトロフィーが贈呈されました。高橋畜産の高橋洋平代表取締役は受賞の挨拶で「まずはホクレンはじめ地元の関係者皆様にお礼を申し上げます。これからも夫婦力を合わせてSPF豚の持つ能力を最大限発揮できるようがんばります」と述べられました。八幡平ファームの阿部正樹組合長は「8年連続10度目というのは大変名誉なこと、これも従業員の日々の努力の賜物であり、頼もしい仲間を誇りに思います。今後も、潤沢で、バラツキのない豚肉供給に力を入れていきたい」と挨拶、続いて福島大輔農場長が「すばらしい賞をいただき、今後の励みになります。関係各位のご協力があったことで、その代表としてこの場に立っていると思っています。今も現場で作業している職員のがんばりが数字に出ているのだと実感しています。これからも一丸となってさらにいい数字が出せるよう一生懸命がん

ばります」と述べられました。

続いて2題の講演がありました。

まず、「SPF豚の理念とヘルスチェックの重要性」と題し、(有)輝北ファーム社長の矢原芳博さんにご講演いただきました。矢原さんは、長年日清丸紅飼料(株)の研究所において養豚の臨床検査に携わってこられたヘルスチェックの第一人者です。

矢原さんは「農場から生産性を低下させる疾病を排除し、健康な豚を飼育して安心な豚肉を消費者に届けるというSPF豚事業の理念は正しいといえる。現在、SPF豚を飼育していない農場でも農場の生産性を低下させる疾病を排除する取り組みが行われており、SPF豚認定基準に準ずる管理を取り入れている。方法論はさまざまだが、病気を清浄化することの重要性は不変である。SPF養豚は、誰よりも早くそれを提唱した」。

「ヘルスチェック手法は重要。日清丸紅飼料(株)のシステムパックは、農場内における生産性を阻害する要因を洗い出し、効果的な疾病対策プログラムを立案、生産成績の向上に役立てる家畜・家禽の定期健康診断。疾病への取り組み姿勢は、SPF豚に通じるものがある」。

「今後もヘルスステータス、バイオセキュリティの向上は不変。それをサポートするヘルスチェック技術も非常に重要で、進化させなくてはいけない。疾病を一掃するための豚群総入れ替も決して荒唐無稽な話ではない。今後ともSPF豚の理念を踏襲しながら、時代の要請に沿った進化を期待したい」などと述べられました。

最後に、いち早くアニマルウエルフェアの観点を取り入れた農場経営に取り組みされた、JA北九州ファームの稗田直樹社長が「養豚場におけるアニマルウエルフェアの取り組み事例と課題」をテーマに講演されました。

稗田さんは「アニマルウエルフェアの5つの自由の⑤「正常な行動ができる自由」を実践している農場は多くはない。当社の玉名農場ではオートソーター、離乳子豚・肥育豚の発酵床飼育方式を取り入れ、⑤の自由に取り組んだ」と述べ、農場について紹介いただきました。

「母豚の大群飼育には、オズボーン社製(米国)フードステーション(Teamシステム)を採用、母豚がフードステーションの中に入ると、装着したICタグに反応し、設定された量の飼料が給与される(数回に分けて給与)。母豚は設定された量を摂取するまでは自由に出入りでき



矢原芳博・(有)輝北ファーム社長



講評を述べる濱岡隆文選考委員長



(有)高橋畜産の高橋洋平社長

(農)八幡平ファームの阿部正樹組合長(左)と
福島大輔農場長



稗田直樹・JA北九州ファーム(株)社長

るため給餌時間に騒ぐことはなく、非常に静かである」。

「母豚の交配は全頭ストールで人工授精。雄は発情確認用の肉豚玉付きのみ。交配4週後にストールで受胎確認後、群飼房にて飼育。1房あたり50頭前後。1母豚当たり1.6㎡。分娩1週間前までの11週間を大群飼育。豚舎は全面スノコ床で、糞尿分離方式、トンネル換気、オールイン・オールアウト方式を採用している」。

「母豚大群飼育のメリットは、①ストレスが緩和され、非常におっとりした、人なつっこい母豚が多い②給餌時間に母豚が騒がない③オールイン・オールアウトのため、豚房の洗浄消毒が容易、など。デメリットは、①個体管理が難しく、体調不良豚の処置が後手になる②闘争による、趾蹄故障、不受胎、流産等の事故が多い③フードステーションに慣れない母豚がいるので、隔離場所の確保が必要④外国製のため(すべて英語表記)、緊急時の対応が遅くなり、機能をすべて生かしきれない⑤1母豚当たりストールよりかなり広いスペースが必要。狭いと母豚のストレスが増し陰部かじりが発生する。ストールからの改造は困難が伴い建設コストも高くなる」。

「子豚の大群飼育は生後約21日令で導入。9棟のうち7棟常時飼養、1棟洗浄消毒、1棟床準備。1棟当たり、450～500頭収容。概ね7週間で肥育委託農場へ出荷。地元の土壌菌を利用した発酵床方式」。

「子豚大群飼育のメリットは、①子豚の腹冷えがないことから、子豚

が元気②ストレスが少ないように見える③事故率が低い④走り回って筋肉が発達するので肉付きが良くなる、など。デメリットは、①体調不良子豚の隔離場所の確保が必要②ワクチン接種や治療の注射が大変③床材の管理と入替作業が大変。抗酸菌症の発症リスクあり。繁殖豚の飼料に酪酸菌を転嫁することで駆除④子豚の出荷作業が大変、などがある」。

「肉豚の大群飼育は6棟あり、3週間おきに導入(生後約70日令で導入)、1棟当たり410～430頭の大群飼育。年間約7000頭の肉豚を出荷。オートソーターを利用した出荷豚の選別を実施(概ね16週間で出荷)。各棟オールイン・オールアウト実施。キノコの菌床、オガコ、モミガラを混ぜて発酵させたものを利用した発酵床方式を採用」。

稗田さんは、最後に「『正常な行動ができる自由』を確保する母豚大群飼育は、効率的な生産という面では単飼方式より劣ると思われる。アニマルウェルフェアの効率性、コストメリット、販売メリットについて、生産者、消費者、流通関係者の納得をどこまで得られるかが、これからの課題となる」とし、講演を締め括りました。

なお、協会ホームページにて、当日の講演や表彰式の動画を公開しております。ぜひご覧ください。

多くの皆様のご協力でハイブリット方式ながら、セミナーを開催することができました。講師、表彰農場、関係各位に心より感謝申し上げます。

SPF豚農場と飼養頭数の分布 (2023年3月現在)

表1 認定農場の分布

飼養規模(頭)	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	飼養母豚数
99以下	1	0	2	0	0	2	0	5	266
100～299	6	4	21	3	0	1	6	41	8,533
300～599	3	4	5	2	0	7	7	28	11,489
600～999	1	6	6	1	2	3	12	31	24,193
1,000以上	2	9	3	0	0	1	6	21	30,000
計	13	23	37	6	2	14	31	126	74,481
子豚育成・肥育専門	2	4	16	1	1	6	20	50	
合計	15	27	53	7	3	20	51	176	
飼養母豚総頭数	7,900	20,257	14,782	2,107	710	6,962	21,763	74,481	

表2 認定農場および飼養母豚数の推移

年度	2018		2019		2020		2021		2022	
	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	13	5,618	13	6,597	13	7,653	13	7,837	13	7,900
東北	33	25,888	30	21,355	28	22,704	27	22,377	23	20,257
関東	42	14,974	41	14,997	40	14,890	40	15,059	37	14,782
北信越	8	2,885	7	2,502	7	2,345	6	2,079	6	2,107
近畿東海	2	720	2	729	2	738	2	703	2	710
中四国	15	7,111	13	6,797	13	6,724	15	7,446	14	6,962
九州	30	22,460	31	22,556	31	22,602	30	21,747	31	21,763
子豚育成・肥育専門	47		42		45		49		50	
全国	190	79,656	179	75,533	179	77,656	182	77,248	176	74,481

例年同様、やむを得ない事情により認定を停止している農場については、戸数は集計に含め、頭数は含めない。GGP・GP 17農場および子豚育成・肉豚肥育専門農場を含む。前年度に比べ農場数は微減だが、飼養母豚数は2,500頭以上減少した。これは中規模一貫農場の退会が続いたことによる。引き続きマルチサイト方式の農場が増加傾向にある。全国の飼養母豚数78.9万頭(令和4年2月現在、畜産統計)に占める認定SPF豚の割合は9.5%と、前年度を0.1ポイント上回った。

CM認定農場の生産成績 (2022年度)

表1 一貫生産農場

	件数	母豚数	生産指数	農場回転数		農場飼料要求率		出荷頭数 / 母豚		A 薬品費 / 肉豚	
	97	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	25	638	124.67	1.99	17.52	2.98	26.65	25.11	47.05	94	33.45
B	24	772	110.24	1.87	16.53	3.04	26.14	24.15	45.24	253	22.33
C	24	514	101.89	1.75	15.44	3.17	25.13	22.47	42.10	297	19.22
D	24	392	90.29	1.60	14.14	3.28	24.28	20.95	39.26	392	12.62
最高成績			136.84	2.21	19.51	2.46	30.74	28.23	52.90	4	39.72
最低成績			81.88	1.15	10.15	3.70	21.01	15.81	29.62	445	8.86
平均値		580	106.96	1.80	15.92	3.12	25.56	23.19	43.45	257	22.02

表2 繁殖専門農場-II (分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場)

	件数	母豚数	生産指数	分娩回数 / 年		離乳頭数 / 母豚		出荷子豚数 / 母豚		A 薬品費 / 子豚	
	11	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,109	123.00	2.47	21.46	25.84	22.94	25.15	46.94	67	31.67
B	3	954	113.63	2.32	20.15	26.39	23.42	25.55	47.70	141	22.37
C	3	576	106.96	2.24	19.51	24.09	21.39	22.56	42.11	128	23.95
D	2	878	90.80	2.29	19.88	22.84	20.28	21.32	39.80	233	10.85
最高成績			125.29	2.53	22.00	28.69	25.47	27.25	50.86	15	38.11
最低成績			85.48	2.08	18.10	20.42	18.13	19.12	35.69	246	9.21
平均値		879	110.22	2.33	20.28	24.97	22.16	23.86	44.53	134	23.24

表3 肥育専門農場-II (繁殖専門農場-IIまたは子豚育成農場から子豚を導入し、肥育している農場)

	件数	出荷頭数	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A 薬品費 / 肉豚	
	11	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	3	8,466	121.27	2.95	60.76	98.90	39.03	117	21.48
B	3	9,844	112.25	3.22	56.22	97.88	28.83	80	27.20
C	3	11,705	100.47	3.39	53.54	97.92	29.24	141	17.70
D	2	3,782	95.82	3.75	47.59	97.92	29.24	133	18.99
最高成績			129.35	2.75	64.09	99.13	41.27	0	40.00
最低成績			94.31	3.99	43.58	95.96	9.65	198	8.64
平均値		8,874	108.51	3.29	55.16	98.18	31.80	116	21.56

表4 肉豚または子豚1頭あたりA薬品費使用

一貫経営

薬品費 / 肉豚	農場数	平均金額
100 円未満	18	47
100 円～ 199 円	15	163
200 円～ 299 円	16	241
300 円～ 399 円	35	351
400 円～ 450 円	13	423
最高		4
最低		445
上位 25%の平均		94

繁殖専門農場 (繁殖-II)

薬品費 / 子豚	農場数	平均金額
100 円未満	5	62
100 円～ 199 円	2	121
200 円～ 250 円	4	231
最高		15
最低		246
上位 25%の平均		67

肥育専門農場 (肥育-II)

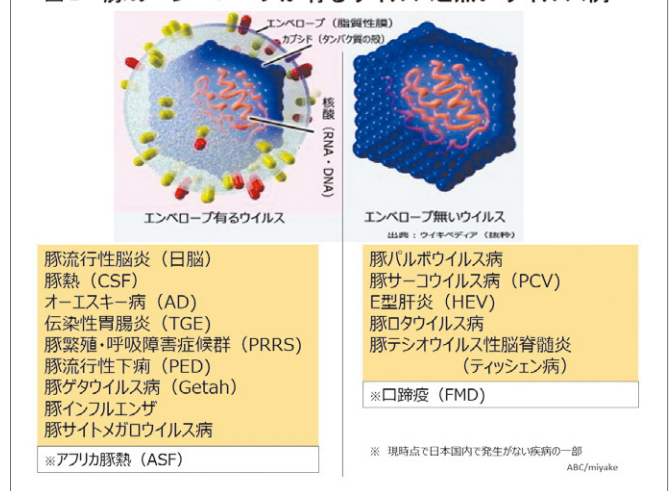
薬品費 / 肉豚	農場数	平均金額
100 円未満	3	29
100 円～ 200 円	8	149
最高		0
最低		198
上位 25%の平均		117

消毒薬を選ぶ際に考慮すべき7つを挙げます。①使用時期 (Time: 低温下では効果が減弱しやすいことは前号90号に紹介)、②場所 (Place: 有機物が多い場所や地面などでは消毒効果は上がり難い)、③場合 (Occasion: 防疫対策を強化する必要のある場合、と場の帰りや疾病発生時など)、④方法 (How: 動力噴霧、ミスト噴霧、くん蒸、発泡消毒、浸漬。本誌87、88号)、⑤環境負荷 (Environmental Load: 散布後の成分の分解が早く、植物や水生動物への影響がない、浄化槽に影響しない)、⑥費用 (Cost: 常時使用できるコスト)、⑦証明 (Evidence: 信頼できる複数の報告で効果が認められている)の7つです。著者はこれらを頭文字を並べてTPOヘルスと名付けています。

次に、消毒効果に影響する7つの項目です。①濃度 (Concentration: 濃度が濃いほど効果が高いが、通常量を基本とする。噴霧面が濡れているなどで濃くする場合はコストや環境負荷も考慮して2倍。10倍にして発泡剤を入れると噴霧量は1/10で効果大。本誌87号)、②噴霧量 (Amount: 噴霧量が多いほど効果的。豚舎では最低0.7L/m²、ベターは1.5L/m²。本誌88号表では0.6L/m²よりも1.2L/m²が効果的な結果)、③作用時間 (Time: 噴霧直後は消毒効果が低く、時間と共に高まるが限界がある。菌量6桁(百万個レベル)の *Salmonella Typhimurium* に対する逆性石けん液と過酢酸製剤の実験では、2と3桁(百と千個レベル)以上除菌するには1時間必要、6時間経過時点では除菌効果が4と6桁上がり、それ以上時間が経っても効果が上がらない結果。本誌81号)、④作用温度 (Temperature: 浸漬では高い方が効果

的だが、噴霧では消毒薬を加温するのではなく、作用する場所(部屋)の温度を高くすることがポイント。加温液槽に漬け置いた実験では20℃より50℃、50℃より80℃が除菌度は上がるが、噴霧では4℃の部屋で加熱した消毒液を床に噴霧直後の床面は40℃だが、2~3分で冷え、作用時間の間噴霧場所の温度を保てないので冷水消毒と同等の効果。本誌88号図・表)、⑤有機物量 (Organic matter: 有機物の量が少ないほど効果的。本誌82、90号)、⑥微生物の種類と量 (Microorganisms: 例えばウイルスでは図1のようにエンベロープのあるものはないものより消毒薬が効きやすいとされ、細菌では芽胞菌、ブドウ球菌、レンサ球菌、クロストリジウムなどのグラム陽性菌は、大腸菌、ヘモフィルス菌、サルモネラ菌、マイコプラズマなどのグラム陰性菌よりアルカリ等に耐性があるとされている。また、微生物の数量が多いほど同じ量の消毒薬では不活化困難)、⑦消毒回数 (Number: 1回だけの消毒よりも乾燥後もう一度消毒する方が効果的。図2)。この7項目はCATのTOMとNネズミと覚えています。

図1 豚のエンベロープが有るウイルスと無いウイルス例



第13回

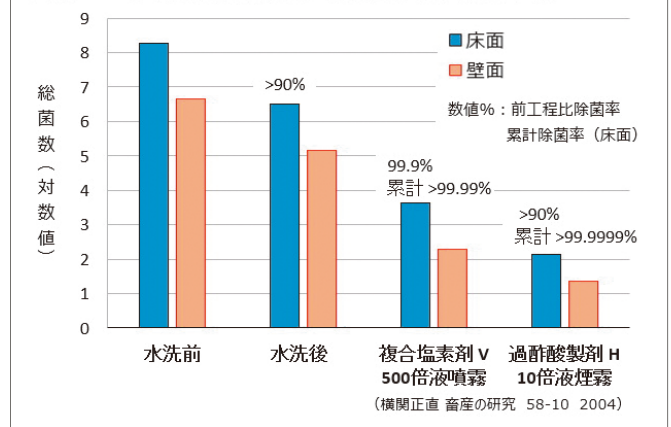
農場バイオセキュリティ強化のための最新情報

消毒薬の選択と効果を強める使い方

アニマル・バイオセキュリティ・コンサルティング(株)

三宅眞佐男

図2 豚舎消毒実験結果 (残存総菌数と除菌率)



プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPF 豚の角煮

●レシピ提供・道産酒場きたぎん(東京都千代田区)

井上尚文

今号のレシピは定番の豚の角煮です。丁寧にできればプロの味に近づけそうです。おいしく仕上げるポイントをいくつか教えていただきました。味付けはシンプル、時間をかけて一度トライしてみてもいいのではないでしょうか。

●材料●(作りやすい分量)

SPF 豚バラブロック 1kg
 <合わせ調味料>
 醤油 500cc
 みりん 500cc
 砂糖 300g
 生姜スライス 適量
 ゆで卵

●つくり方●

① 鍋にバラ肉とたっぷりの水を入れて火にかけます。湯が煮立ち始めて豚肉の表面が白くなったら弱火にし、アクを取りながらペーパーで落とし蓋をして、竹串がスーッと通る位になるまで茹でます(120～180分)。

★POINT 水が少なくなるので水を注ぎ足しながら煮ます。圧力鍋があれば時間短縮になります。

② 火から下ろし、落とし蓋をしたまま冷めるまで置きます。表面に脂が白く固まったら取り除きます。

★POINT 粗熱が取れたら冷蔵庫に入れて一晩置くといいです。

③ ②を食べやすい大きさに切って鍋に入れます。合わせ調味料と水 1300cc と生姜スライスを入れて火にかけて煮立ったら弱火にし、ペーパーで落とし蓋をして肉が浸るようにしながら 20 分煮ます。

④ ゆで卵を加えてさらに約 10 分煮ます。火を止めて粗熱が取れるまで鍋止めにします。

★POINT 粗熱が取れるまでそのまま置く事で、肉が煮汁を含みジューシーで柔らかくなります。

⑤ ゆで卵と一緒に盛りつけて完成です。

認定情報

●2023年3月認定農場

※次回認定委員会は2023年6月8日(木)の予定

(有効期間：2023年3月9日から2024年3月末日まで)

岩手県・(農)八幡平洋野牧場、秋田県・(株)シムコ大館GGPセンター、全農畜産サービス(株)由利本荘SPF豚センター、全農畜産サービス(株)秋田大仙SPF豚センター、(有)十和田湖高原ファーム、宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、茨城県・(有)中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、同実験動物豚舎、千葉県・(株)シムコ館山事業所、鈴木治彦養豚、(株)スターピッグファーム、同肥育農場、(株)飯田ファーム、(有)ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、(有)伊藤養豚飯岡農場、(有)

鐺木ピッグファーム、宝理養豚繁殖農場、同肥育農場、長野県・(農)エスピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、富山県・(株)シムコ八尾GGPセンター、愛知県・(株)知多ピッグ前山農場、同美浜農場、島根県・奥出雲ファーム(有)、熊本県・全農畜産サービス(株)西日本原種豚場、(有)やまとんファーム、(有)ピッグファーム陳、(株)佐々牧場、同第二農場、宮崎県・(株)ナンチクファーム守山細田農場、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)出水農場、同阿久根農場(以上34農場)

●理事会を開催しました

3月24日(金)、KKRホテル東京「白鳥の間」において、令和4年度の理事会をリモートとのハイブリッド方式で開催いたしました。6月の代議員会に諮る議案等について協議いたしました。

●SPF豚セミナー動画をご覧ください

3ページでもご紹介していますが、1月26日のSPF豚セミナーの動画を協会ホームページ <http://www.j-spf.com/> で公開しております。ぜひご覧ください。



株式会社
中嶋製作所
(長野県長野市)



本社の皆さん。前列左から2人目が中嶋功雄社長、3人目が黒木悟常務



中嶋製作所の原点ともいえる、創業者・中嶋一雄氏発明「キングヒーター」

畜産用機械一筋 100年の歴史を誇る「いい会社」 確かな技術と営業力で 畜産農家をサポート

(株)中嶋製作所は長野市篠ノ井にある、「ナカマッチク」のブランド名で知られる畜産関連機器の専門メーカーです。特に自動給餌システムでは国内でも屈指のシェアを誇ります。

取引先には認定農場の名前がずらり、ご紹介するまでもない会社かもしれません。

創業は1921年、100年以上の歴史を誇ります。創業者・中嶋一雄氏が養蚕用の育雛器を養鶏用に転用した「キングヒーター」を皮切りに、畜産機械設備一筋で畜産農家を支えてきました。

その強みはなんといっても自社開発・自社生産・自社販売。営業エリアを3つに分け全国を網羅、スピーディーできめ細やかなサポートがユーザーの高い評価を得ています。

また、畜産業界の深刻な問題である人手不足をフォローするため、洗浄ロボット等IoTやAIを活用したスマート畜産への取り組みにもいち早く取り組んでいます。

「技術力、営業力には自信がありますが、そこにどう付加価値をもたせるか、生産者の皆さんと一緒に問題解決を目指す存在でありたいと思います」と、創業者のお孫さんで三代目社長の中嶋功雄さん。ご本人は次男で会社を継ぐ気は全くなかったという一方で、「小学生の時に作文で『会社に入って父と兄を助けて行きます』と書いて発表したらいいんです。記憶はないのですが(笑)」とのこと。会社のトップとなった今、目指しているのが「市場規模や国内情勢を考え、会社を大きくすることより、ダウンサイジングしても長く繁栄する企業にすることです。生産者にとっての課題でもある持続可能な畜産をサポートしていく存在でありたい」。SDGsにも積極的に取り組み、昨

年出版された『未来を創る長野県SDGs企業』(東洋経済新報社)に掲載されている10件のSDGs先進事例に、同社が取り上げられています。

社員は現在100名。取材に伺って感じたのは雰囲気よさ。温かく迎え入れようという気持ちに対応いただいた方々はもちろん、その場にいた方全員から伝わりました。常務取締役の黒木悟さんは宮崎県出身の大学卒業前にアルバイトをした南九州営業所でそのまま入社されたという異色の役員。また、親子2代、3代にわたって勤務している社員もいるそうです。工業ロボットが稼働する工場内や設計部門の部屋にも若い人の姿が目立ちます。「家族に入社を薦められる会社、居心地のいい会社でありたいですね」と中嶋社長。

業界では抜群の知名度を誇る同社、中嶋社長は「今までは知人ぞ知る、でいいと思っていましたが、知名度と認知度には違いがあります。これからは広く一般の方に会社を知ってもらう努力をしなければならぬと思います」。市の教育委員会の会議に出席することもあるという中嶋社長、地元の小学生を対象にした工場見学に協力したところ、依頼が増えて対応に困るほどになったそうです。工場見学の社名入り帽子のデザインは、若い社員のアイデアを採用。先々代、先代からの社訓「社会から得た利益は社会に還元する義務がある」をもとに、地域社会への貢献にも積極的に取り組んでいます。

「大きい会社より「いい会社」、そんな言葉がぴったりの同社、お話をうかがって元気が出て前向きになることができました。これからも長年にわたって築き上げられた、確かな技術力と営業力で、認定農場はじめ畜産農家の心強いパートナーでいていただきたいと思います。(編集部)

編集後記

コロナ新派生型「XBB.1.5」が登場しましたが、第8波は終息していきそうなムードです。一方、豚熱はイノシシへの感染が続いており油断できません。また、今冬の強病原性鳥インフルエンザの被害は驚愕でした。さらに、飼料原料は高止まりで、飼料価格も畜産経営を圧迫し続けています。こんな中だからこそ生産性の向上と、生産性を低下させる疾病排除が求められます。提言にもあるように、生産成績の向上は、繁殖成績の改善が最重要です。丈夫で健康な子豚の育成技術向上が、これからの養豚経営を支えるキーポイントになる気がします。ここに人・物・金を集中させる工夫が必要になりそうです。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第91号 2023年4月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀